発狂診察室

さちこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
発狂診察室

【Ｎコード】
Ｎ５７２８Ｂ

【作者名】
さちこ

【あらすじ】
彼は先生と呼ばれていた。少し変わった先生たった。

彼は先生と呼ばれておりました。
黒く少しえりあしが長い髪に、白衣を身につけ、体からは薬品の匂いがしてました。格好こそ確かに陰気臭いですが、普通なものの、先生は、少し変わっている方です。それは平素極端に喋らないくせに、患者に対してはえらく饒舌であること、いや普通に聞こえましょうが、しかし内容がまたおかしい。あなたの瞳はまるで深海の如き秘めた色をしているとか、それはそれはおおよそ患者に対し仰っしゃる言葉として適当ではないものです。
だからと言って恋人に対して言っても、悪寒がきそうですね。しかしそれ以上に、そのお言葉を頂く患者さまが普通の人間としては考えられない病気を患っていらっしゃる点が、特に常軌を逸脱していると言えましょうか。例えば私が一番印象に残っていますのは目を覚ましていられるのが三時間の方でしょうか。ああそんな者たちを診察する先生の脳みそは一体どうなっているのか。さて今日私はあるカルテを見つけました。ちょうど一年前のこと。ああ、懐かしいこと。

「ごめんください」

細い声でした。ドアを開ける音もなく入ってきた少女は、水色のパンプスを鳴らして受付まで歩いてまいりました。

「いかがなさいました？」

「あの、ここは、診療所でしょうか」

「ええそうですよ」

「近くに住んでいるんですけれど…こんなとこにあったかしら、と…」

「ここは求めた人しか来れませんからね」

「え？」

「とにかくおかけになって。保険証は結構ですわ」

少女はいぶかしげにわたしを見た後、後ろの革張りのソファーに腰をかけた。

診療所はとても狭い。ドアを開ければ左手に受付、そしてその斜め前にはすぐ待合用のソファー。その向かい、受付の隣にあるドアの向こうが先生の診察室である。先生が受付とつながっているドアから出てきた。わたしはにこりと笑う。これが、患者です、の合図だ。先生は頷いて、また診察室にひっこんだ。わたしは受付から出て、少女にどうぞ、と診察室のドアを開けた。

「それでどのような？」

口を開いたのが先生ではなく私であったのが意外だったのか少女は、はあ、と間抜けな声を出した。

「ああ、ごめんなさいね、先生は寡黙な方なの。でも耳はついていますから話は聞いてますよ。どのような症状なのですか？」

「あ、あの、こんなの、おかしいんですけど」

「ええ」
「わたし、恋をしなくちゃ死んでしまうんです」
「まあ」
素敵、と言いかけて口をつぐんだ。少女にとっては深刻な話である。
「ならば恋をなさればよろしいのでは？」
「駄目なんです、わたし、ある事件のせいで、男性恐怖症なんです」
「事件？」
「…強姦、されたんです」
少女は細い声ではっきりと言い切り、それからわっと泣いた。パンプスとおそろいの水色のワンピースにぽつぽつ水玉ができてゆく。先生はぎっと椅子を鳴らした。先生は男であるけれど大丈夫なのかしら。
「ねえ、それって見るのも駄目なのかしら」
「いえ、あの、ひとりのときに傍にいられるのが…今は看護士さんがいらっしゃるから、平気」
「そう…」
困ったことになりました。私は先生の診察を見てはならないことになっています。先生がお話され始め、そして三度咳をなさったときに、そっと出ていく手筈になっています。そして先生は、またぎっと椅子をならして、お話を始めました。
「君は恋をどう定義付ける？異性にするものかい？いやいや同性にだってあるだろう。万葉集にこんな歌があるのを知ってるかい。桜花時は過ぎねど見る人のこひの盛りと今し散るらむ…植物に対する

ものも恋だ、いやしかし君は美しい髪をしているね」

ここまでお話して先生は三度咳をなさりました。私はそっと立ち上がります。先生は口を開いて続きを話し始めました。少女は先生の口元に釘づけになっています。これなら平気でしょう。ぱたんとドアを閉めました。

受付の椅子に座ってぼんやり診察室の方を眺めます。先生は今どんな甘美な言葉を少女に与えているんでしょう。しかし、少女は何故病気を悟ったのでしょうか。ああそこを聞くべきでした。私としたことが。

三十分ほどして少女は出てきました。目は虚ろで足元はふらふらしています。

「お疲れ様です」

「ああ、ああ、看護士さん、わたし、とても嬉しいわ」

「さようですか。お薬は処方されていないみたいですね。それではどうぞ、お大事になさって」

「ええ、わたし、もう、素敵だわ、お世話になりました、ああお金」

「必要ないですわ、あなたのその言葉がもう、充分価値のあるものですから」

「ああほんとうにどうもありがとう、ありがとう」

そうして少女はふらふら水色のパンプスをならして帰っていかれました。その時先生が診察室から出て来られて私にカルテをお渡しになられました。私は綺麗な字が並べられたそのカルテに目をやります。すると先生が珍しく口を開かれました。

「彼女はきっとまた来るだろうね」

「あら、完治されたんじゃないのですか」

「今日の方は完治したさ、けれど新たに発症するかもね、まあカルテをちゃんと見なよ」

そうして先生は診察室にお戻りになりました。先生の喋り方は可愛らしくってとても私は好きです。しかし普段はめったに聞くことができないことが残念でなりません。私は再度カルテに目をやりました。

誰かを意識しないと発作を起こす。発症したのは三年前。間男に強姦されたことが原因で恋人と別れた直後に現れる。恋人のことを考えれば治まることに気付くが、慣れも生じ、長くは続かない。男性恐怖症により恋愛は難しい。

（あらそうゆうことだったのね）

処方　　自分に恋をする

（ぷっ）

あら失礼。思わず吹き出してしまいました。しかし先生の表現はかわいらしくていらっしゃること。きっと少女を褒めちぎったことで

しょう。少し羨ましいわ。くすくす笑いながら備考に目をやる。

備考　／　自分を好きでいる限り死ぬことは不可能であろう

ああ少女が再度ここに足を運んだ時、先生はあの深く凜とした声でどのように少女を罵倒するのかしら！わたしはふっと笑いカルテを仕舞いました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5728b/

発狂診察室

2010年11月5日07時00分発行